

〈研究ノート〉

歯舞群島等の昆布漁従事者と 富山県の昆布文化

A study of the relationship between
Toyama Prefecture's kelp culture and
the formerfishing and kelp harvesting
migrants of the Habomai Islands

齋藤 貴之
Takayuki SAITO

1. はじめに

日清戦争以降のたび重なる戦争によって慢性的な資源不足に陥った日本は、資源の確保を求めて領土の拡大を図る一方で、さまざまな物資の軍事転用を模索した。その一環として、ヨード（医薬原料）と塩化カリウム（爆薬原料）を多く含む昆布が注目され、昭和初期にその生産量が大幅に拡大することになる。特に根室の生産量の増加が著しかったが、これは羅臼や歯舞群島、色丹島での昆布漁が本格化し、そのすべてが根室に集約されたためであった。このとき、それらの地域で昆布漁に従事していたのが富山県、特に県東部の沿岸漁村出身の漁民であった。彼らは、持ち前の忍耐強さや勤勉さから網元や「仕込み親方」などからの信

頼を得て、早くから歯舞群島等での昆布漁に従事し、明治の終わり頃からは家族総出で歯舞群島等へと移り住むようになった。終戦とともに歯舞群島等から引揚げてきた富山県出身者の数は1,200人以上にのぼる(山田 1986: 48)。

近年、人類学における移民研究の新たな傾向として、旧植民地からの「帰還移民」あるいは「引揚者」の帰還後の暮らしや文化に着目した研究がみられる(Smith 2003、大川 2011、島村 2013)。日本においては、日本の領土拡大を契機に台湾、朝鮮、満州、関東州、南樺太、千島列島、南洋諸島などへ移住し、1945年の日本の敗戦による脱植民地化の過程で帰還した660万人にも上る人びとを「引揚者」と呼び、さまざまな分野で彼らに関する研究が蓄積されてきた(岩槻 1995、小林 2005、蘭 2013)。しかしながら、旧植民地等からの引揚げという大規模な人口移動が日本各地にもたらした影響は少なからずあったにもかかわらず、彼らの戦後の暮らしや文化に関しては、戦後開拓についてのいくつかの報告(蘭 1994、三室 2001、野添 2006)があるのみで、取り組むべき大きな課題として手つかずのままになっている(島村 2013: 2)。こうした中で、現地調査や聞き取り調査などによって彼らの生活誌に迫った島村他(2013)の業績は高く評価される。ただ、島村は「[内地]に引き揚げた後の引揚者の生活がいかなるものであったか、またそれは、周囲の社会や日本社会全体にとっていかなる意味をもっていたか、という点を問う必要がある」(島村 2013: 2)と述べてはいるものの、この点に関する議論が十分になされたとは言い難い。

ところで、アメリカ合衆国における豊かな食文化であれ、ブラジルにおける豊かな食文化であれ、それらが生まれ、受け入れられた背景には、移民によってもたらされた文化的影響があった。しかし、移民が受け入れ社会にもたらす影響については、摩擦や差別、アイデンティティやエスニシティの問題といった負の側面にばかり注目が集まり、正の側面に

目が向けられることはあまりない。現在、地域の独自の文化として認識され、広く受け入れられている文化の中にも移民によってもたらされた、あるいは生み出されたものがある。「引揚者」に関しても、「引揚者文化」とも言える新しい文化がもたらされ、生み出され、広く日本社会に受容されているという実態がある（例えば、屋台ラーメン、餃子、明太子などの食文化）（島村 2013：12）。そして、そこには彼らの移動の歴史が刻みこまれており、彼らによって試みられた地域住民との間に生じた摩擦を軽減するための戦略や働きかけが内包されている。それにもかかわらず、それらの文化がどのようにして生まれ、どのようにして取り込まれていったのか、などに関する調査研究の蓄積は乏しく、未着手のまま取り残されているのである。

そこで、本稿は、かつて歯舞群島等で昆布漁に携わっていた富山県東部の沿岸漁村出身の漁民に着目し、彼らの移動によってもたらされた文化的影響について考察検討する。これにより、先行研究の不備を補い、移民研究ならびに「引揚者研究」に新たな視座を供することを目指す。

本稿が取り上げる歯舞群島は、多楽島、志発島、勇留島、秋勇留島、水晶島、および貝殻島をはじめとする島々からなる。北海道東部の根室半島の東の沖に位置し、暖流と寒流がぶつかり合うこの地域は亜寒帯気候に属するため、比較的温暖で過ごしやすく、また豊かな水産資源に恵まれ、特に質の良い昆布がとれる好漁場としても知られている。黒部市史に、「越中衆とは、主に明治中期に根室に渡って根室・羅臼・千島方面の漁業を開発し、好漁期には郷里の出稼ぎ漁業者を雇い入れて漁業家として活躍した富山県出身者を指す言葉である」（黒部市史編纂委員会 1992：334-335）とあるように、それらの島々は「越中衆」と呼ばれた富山県出身者によって拓かれたとされている。彼らは鯨・鮭・鱒などの各漁場で労働者として働き、資本を蓄えると開発の余地のあった羅臼や千島へと渡り、昆布漁やホタテ漁などの沿岸漁業や、あるいはタラヤカレ

イ、オヒョウなどの沖合漁業に従事し、それらの地域での新たな漁業を勃興させ、多くの同郷出身者を呼び寄せたのである。このため、終戦時に歯舞群島に居住していたとされる5,279人のうちの約3割に当たる1,259人が富山県出身者で¹⁾、そのほとんどが黒部市や入善町などの県東部の沿岸漁村の出身者であった(山田 1986: 48-50)。

2. 歯舞群島等の昆布漁従事者とその引揚げ

まず、富山県出身の漁民が歯舞群島等へと定着した過程と島々での暮らし、その後の引揚げについて概観する。

2-1. 歯舞群島等の開拓と富山県出身の漁民の定着

周知のとおり、北海道の開拓が本格化するのは、1869年7月に開拓使が設置され、翌年に黒田清隆が樺太問題担当の次官として開拓使に赴任して以降のことである。北海道および樺太を視察した黒田が、政府に北海道経営に関する建議を提出したことで、1872年より「開拓使10年計画」が開始され、屯田兵の移住、幌内炭鉱の開発、官営工場の建設、集治監の建設などが進められた。さらに、1886年に北海道庁が新設され、「北海道土地私下規則」(1886年)および「北海道国有未開地処分法」(1897年)の制定等により道内の国有未開地が大量に処分されるのと平行して、道外から多数の移民が道内各地に流入するようになる。明治20年代の半ばからは、国をあげて北海道への移住を奨励し、その動きを加速させていった。北海道庁は「北海道移住案内」等を刊行することで移住を促し、国も内務省訓令により北海道移住民のための汽船・汽車の割引券を発行するなどしてそれを後押しした(黒部市史編纂委員会 1992: 324)。結果、1886年から1922年までの36年間の移住者総数は200万人を超えることになる(北海道総合政策部情報統計局統計課 2017)。

こうした中で、富山県も、県報に「北海道移住案内」の要点を掲載す

るなどして、団体移住を積極的に奨励したほか、移住を斡旋する民間業者も現れ、移住に向けた動きが活発化する。北陸からの移住者のほとんどが伏木港（富山県）から船で北海道に渡ったため、周辺地域は船を待つ移住者であふれ、北海道庁も「移住民事務取扱事務所」を設置した（山田 1986:56）。この結果、富山県内からは約4万世帯が北海道へ移住したとも言われ、1894年から1898年にかけて7,351戸（全国第2位）、1905年から1909年にかけて9,126戸（全国第1位）、1915年から1919年にかけて6,370戸（全国第8位）を数えることになる（永井 2007）。

富山県東部の沿岸漁村の漁民と北海道の関わりは、まずは出稼ぎという形で始まった。この地域の出稼ぎ漁業は明治以前からあったとされているが、明治期から大正期ころまでの北海道方面への出稼ぎ漁業に関する確固たる資料は乏しく、出稼ぎ先や出稼ぎ者の数などを正確に把握することは難しい。ただ、下新川郡出漁団の記録によれば、1883年頃、はじめて生地地区（現 黒部市）から漁民10名が北海道に渡り鯨漁に従事し、さらに1895年には500人が根室へ渡り、昆布漁に従事したとされている（黒部市史編纂委員会 1992:329）。県東部の沿岸漁村から毎年多くの漁民が出稼ぎに出るようになった背景には、沿岸漁業の不振がある。この地域の海底は起伏に富み、また底質は砂泥土であるために魚種も豊富であったが、海岸線が短い割に漁民の数が多く、また流れが早く波も荒いため、県東部の魚津や滑川、西部の新湊や氷見などとは異なり定置網などの大規模漁業が発達しなかった（黒部市史編纂委員会 1992:172-176）。加えて、耕地面積が狭いため「新川木綿」²⁾の生産等の副業に頼っていたが、1877年以降、輸入の機械紡績に押されて木綿問屋が相次いで倒産し、頼みの綱までも失うことになり、「中越新聞」（1886年3月2日）がこの地域の近況について「漁業者の中でも甚だしき者は、日々粥の重も湯さへ飲むことができず、近郷へ乞食に出る者二百余名の多きにある」と報じるほどの状況に陥っていた（黒部市史編纂委員会 1992:

329-330)。こうした苦境を打開すべく、県や町村が北海道方面での出稼ぎを奨励したことをきっかけに、利尻・礼文の両島をはじめ、小樽、函館、釧路、根室などほぼ全道各地に出稼ぎに行くようになる³⁾。富山県出身者は、その持ち前の忍耐強さや勤勉さを買われ、道内各地で重宝されていた。たとえば、黒部市史によれば、鷹栖村（現 旭川市および鷹栖町）の松平農場の農場主である松平直亮は「越中人は勉学が浅いけど働く力が日本一だ」といって越中人を求めたという（黒部市史編纂委員会 1992：323）。

ところで、根室市史に、「明治三十年代以来、漁獲高の減少という大きな問題に遭遇し、その矛盾をどう解決していくか、すでに既往の鯨・鮭・鱒・昆布の時代は去り、新しい分野にその資源を求めなければならない必然性に追い込まれていた」（渡辺 1968：162）とあるように、根室地域の漁業経済の大きな柱であった鯨や鮭鱒の漁獲高が大きく減少したことで、昆布採取業への転換や従事者数の増加が生じたものの、そこにはすべて漁民を受け入れるだけの余力がなかった。このため、この地域の漁業者は、他の職業に就いて兼業として漁業を続けるか、あるいは新たな漁業資源を開拓するかのいずれかを迫られていたのである。こうした状況の中で、新たな漁業資源として見いだされたのが、ナマコ漁、ホッキ漁、エビ漁、そしてヨード製造業であった。特に、ヨード製造業が昆布採取業者の副業として盛んになったことは重要である。

根室地方でヨード製造が初めて行われたのは明治 25 年であったが、当時は昆布だけでなく鯨も鮭鱒も盛況であったため、長くは続かなかった（渡辺 1968：162）。しかし、明治 30 年代に入り新たな漁業資源の開発が切迫した課題として浮上してきたことに加え、日本の領土拡張と軍備拡大が追い風となった。たび重なる戦争により慢性的な資源不足に陥った日本は、これを解消すべく、一方で領土の拡大を進め、他方で様々な物資の軍事転用を図った。この一環として、政府は、全国各地の漁協

等にカジメ、アラメ、ホンダワラ、昆布などの増産を呼びかけた。それらの海藻に多く含まれる塩化カリウムを爆薬（硝酸カリウム）の原料として、ヨードを医薬品の原料として利用するため、それらの海藻を燃やしてできる「海藻灰」を各地のヨード工場に納めさせたのである。道内でも、第一次世界大戦以降、昆布類を原料とする「海藻灰」の需要が急増し、その価格も急騰した（北水協会 1918）。根室地域のヨード製造業が盛んになったのは1900年代に入ってからであるが、明治37年の日露戦争を契機に一躍増加し、明治42年には花咲および歯舞群島における製造戸数は31戸に達し、その後も緩やかに上昇し、1913年になると製造戸数は約2倍弱の87戸へと急激な発展を遂げ（渡辺 1968:164）、道内産の昆布を原料とする「海藻灰」の7割を生産するまでになる。1913年は日本が第一次世界大戦に参戦する前年であり、根室地域のヨード製造業は明治半ばから昭和初期にかけてのたび重なる戦争と直結しながら飛躍的に発展していったのである。1917年には10,900t余りが生産されており、海藻量に換算すると32,700tから43,600tの乾燥昆布が灰化されたことになり、食用にされるべき雑昆布が不足する事態になったという（大谷・大西 1995）。ヨード製造業の隆盛にともなって、根室地域の昆布の値段も安定し、その生産量も著しく増加することになる。他方で、昆布は栄養豊富な保存食としても食用の面でも注目され、食糧不足の中で貴重なミネラル源として、国内外、特に満州などでの需要が高まっていったのである。

こうした状況の下、国内の昆布生産量は昭和初期に飛躍的に増大することになるが、特に著しく拡大したのが根室地域の生産量であった（図1）。これは、明治の終わり頃から羅臼や千島の漁場開拓が進み、ホタテ漁、あるいはタラやカレイ、オヒョウなどの新しい漁業が試みられる一方で、良質な昆布が生産できる昆布漁場としての整備も進んだことで、羅臼や歯舞群島、色丹島などでの昆布漁が本格化し、その生産量が大幅

に増加する中で、それらの地域で生産された昆布のすべてが根室に集約されていたためである。そして、それらの地域を開拓し、あるいはそれらの地域で昆布漁に従事していたのが富山県出身者であった。

上述のような追い風を受けて、明治後期から大正にかけて、道東の沿

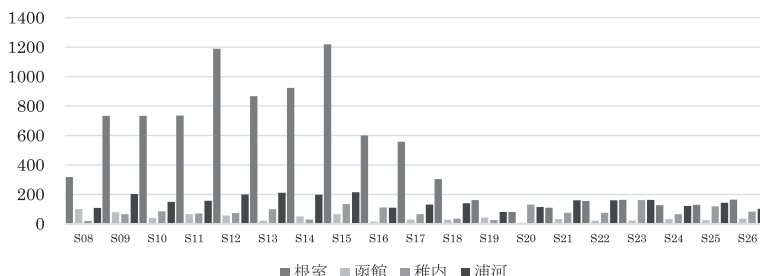


図1 北海道産昆布の検査数量 (支所・年次別、単位：万本)

(『昆布の生産から消費まで』(中川 1953:2-3)より作成)

岸地域での昆布漁が安定してくると、出稼ぎ漁民の中には、資金を蓄え、現地に移り住み働くようになり、さらには自分の浜を持ち、「仕込み親方」として漁場経営に乗り出す者も現れるようになる。しかし、根室周辺の浜は既に所有されているところがほとんどで、新たな昆布漁場を開拓する必要があった(黒部市史編纂委員会 1992:336)。そこで、彼らが目をつけたのが、根室に比較的近く、これまでほとんど開拓されていなかった歯舞群島等であり、そこには良質の昆布漁場が広がっていたのである。歯舞群島等での昆布漁が本格化するのは、明治30年代の終わり頃からで、それ以降、生産量も次第に増加していく。そして、県東部の沿岸漁村の出身者が「仕込み親方」になると、彼らを頼って同郷から数多くの漁民が歯舞群島へと出向き、昆布漁に従事するようになった。

こうして、県東部の沿岸漁村出身の漁民が歯舞群島等に多く渡るようになり、また家族総出で移り住む者も増えていったのである。このこと

は、第二次世界大戦終戦時に歯舞・色丹・国後・択捉などの「北方領土」に居住していた富山県出身者の約96%が歯舞群島に集中し、その内訳も、黒部市出身者が57%、隣接する入善町の出身者が38%と全体の95%を占めている、といった山田（1986：48）の「北方地域元居住者名簿」に基づく分析にもよくあらわれている。

2-2. 島での暮らしと昆布漁⁴⁾

「下新川郡統計書」によれば、1907年には3割にも満たなかった下新川郡の出稼ぎ漁業者の数が1916年には約63%にまで急増し、1920年には約80%の漁業者が北海道、樺太方面に漁業出稼ぎに出るまでになった（黒部市史編纂委員会 1992：176）。こうした出稼ぎ漁業者の多くは、根室・羅臼・千島方面で漁業家として活躍する同郷出身者のもとで労働者として働いた。そして、根室や釧路の沿岸漁業の出稼ぎ漁業者として働く中で、親方に見込まれると、歯舞群島等の浜を任せられ、昆布漁に従事するようになる。

浜を任せられるようになると、昆布漁には人手がかかり、また昆布の生産に携わることのできる4月から11月までのおよそ8ヶ月の間に一年分の稼ぎを得なければならないため、家族総出で島に渡ることになる。そのほかに、「出面」と呼ばれる、東北地方出身、あるいは富山県出身の若い衆を1人か2人、また「おかまわり」と呼ばれ昆布生産に携わる女性も2人から3人ほど雇い入れ、一緒に暮らしていた。

歯舞群島等に浜を持ち、漁業者を雇い入れて昆布漁に従事させる親方は「仕込み親方」と呼ばれ、彼らは、浜を任せた者たちに浜や干場（昆布を干すための浜）のみならず、漁の道具や一年間の生活費、生活物資など島での暮らしに必要なものをすべて貸し与え、昆布漁のシーズンが終わる秋に、納めた昆布の代金で浜賃などとともにそのすべてを精算するというシステムをとっていた。

島で暮らす県東部の沿岸漁村出身の漁民とその家族は、3月中頃に郷里を出発する。当初は、石田港（現 黒部市）からの定期船で函館経由、あるいは直通で根室へと渡っていたが、1914年に北陸線が開通してからは鉄道で、1週間ほどかけて島へと移動した。例えば、生地地区では、島へ渡る人びとが団体で予約し、生地駅から11両から12両編成の臨時の団体列車が運行されていた。料金は6円から7円で、集団で予約するため、料金が通常より安かったという。青森から函館の間は青函連絡船、根室から島々までは小型船で移動した。

島に到着すると、家や干場、納屋の汚れを落とし、4月から春昆布漁、6月頃からお盆頃まで夏昆布漁、そしてお盆過ぎから秋昆布漁というように10月頃まで昆布漁に明け暮れる。昆布を採りに行くのは14、15歳以上の男性で、4ひろほど⁵⁾の1人乗りの磯舟で漁場に向かう。昆布は、「鉤竿」、「鉤ねじり竿」、「ねじり竿」、「しばねじり竿」といった道具⁶⁾で採るが、昆布の種類や海の深さによって道具を変えていた。道具につける長い柄の部分は、細くて、強くて、均整のとれた入善町の「沢杉」を持ち込むなどして自作していたという。

採った昆布は浜に上げ、浜に1本ずつ並べて干すのだが、これは「おかまわり」と呼ばれる女性や子ども達の仕事であった。浜に並べた昆布は昼になると裏返し、これを2日間繰り返す。その後、しばらく納屋で寝かせた後、再び夜露にあてて湿らせて柔らかくして、しわを伸ばしたものをもう1日干して、最後に「みみ」⁷⁾などを切って成形する。こうして仕上がったものを藁で縛って湿らないように納屋で保管し、昆布の表面に自ずと粉がふいてくる頃に出荷する。出荷はお盆前と10月末の年2回で、根室から昆布検査員が来て1等には赤、2等には青、3等には紫というように等級判を押し、等級が決まったものから「仕込み親方」のもとに出荷する。1人あたり年間45段から50段の昆布を出荷することができたという⁸⁾。

出荷を終えると、浜賃とともに立て替え分を精算し、帰り支度をする。冬場は仕事がないため、昆布漁に携わっていた富山県出身者の8割から9割が越冬のため郷里に帰ってきていた。冬場は仕事をしなくとも、家族が暮らせるだけのお金は稼げたという。富山に帰る際には、家で使うため、あるいは隣近所にお土産として配るために、1段の花折り昆布を2つか3つほど持ち帰ってきた。11月末頃に島を発ち、12月には郷里の家に戻り、年越しの準備を始める。このように、歯舞群島に暮らす富山県出身者の多くは、昆布漁のシーズンである4月から11月を島で暮らし、仕事のない12月から3月までは越冬のため郷里で暮らすという二重生活を送っていた。当時、歯舞群島で暮らしていた人びとのおよそ3割が富山県出身者であったとされ、たとえば、水晶島に2つあった小学校の内の1つでは、夏場は50人ほどいた生徒が冬場には10人ほどになっていたという。

島では、子どもも貴重な働き手であり、小さい子と小学校高学年の子は祖父母とともに富山に残るが、それ以外の子は親兄弟と一緒に島に渡り、昆布漁に携わっていた。子ども達の多くは、朝5時に起きて干場の草むしりさせられ、ご飯を食べてから学校へ向かい、帰ってきたら昆布の手入れをし、海がしけると浜に打ち上げられた昆布を拾いに行かされた。浜で拾われる「拾い昆布」のうち、状態の良いものは干して、そのほかは集めておいて畑の肥料にする、あるいは秋に北東の風が吹くころに、雑昆布（雨が降って傷んだり、汚れたりしたものや、切れ端などのようなお金にならないもの）と一緒に海岸で燃やして、その灰をヨードの製造工場に売りに行った。ヨード工場は各島に何か所かあり、それを商売にしている者もいた。干場の草むしりに昆布干しや加工の手伝い、昆布拾い、家事手伝い、畑仕事と忙しい毎日で、しかも学校も遠かったため、1学期の半分も行ったかどうかという状況であった。このため、3学期に郷里の小学校に通うようになると勉強について行くことができ

ず、毎日のように居残りをさせられていたという。そうした事情もあつたか、4年生になると、祖父母とともに残り、6年生まで郷里の小学校に通い、卒業すると再び両親とともに島に渡るとというのが通例であつた。

島での暮らしは、米、味噌、醤油さえ持って行けば、食べるのに不自由はなかつたという。米は15俵から20俵を郷里から船で送り、それが余ると島に残り越冬する隣近所へ配って帰つてきた。カニでもエビでも魚でも採りに行けば、近所に配れるほど採れたという。鯨も網を2枚ほど仕掛けておけば、磯舟にいっぱい採れ、食べきれないため、残りはすべて煮て干して畑にまき肥料にしていた。昆布も、傷むなどして出荷できないものなどを切って畑にまいておけば、肥えた良い土になり、キャベツなどの野菜がたくさん採れた。エビも、1回網を入れると、かごに2杯も3杯も上がってきた。また、根室から船が定期的に来るので、日用品など必要なものを伝えて、それを仕込み親方が買って、次の便で送ってくれた。盆や正月には、衣類などを売りに「担ぎ屋さん」が島にやってくるという。

昆布漁に明け暮れる毎日であつたが、子どもの運動会や神社のお祭り、お盆に、小学校の学芸会といった楽しみもあつた。子どもの運動会や学芸会の際には青年団の武道会も併せて行われ、その日ばかりは島のすべての仕事を休んで、全員で小学校に行き、大いに盛り上がった。また、お盆は島で迎えることになるが、先祖のお墓はもちろん、島で亡くなった者も「寒いところに置いておくのはかわいそうだから」と、火葬して骨を持ち帰って埋葬するため、一般的な墓参りなどを行うことはできない。ただ、お盆の間の2日間は漁を休み、子ども達は提灯をもらい、たまの休みを楽しんだ。位牌は持ってきていたので、先祖の月命日には島のお寺で、あるいは住職に家に来てもらってお経を読んでもらっていた。根室から本願寺の住職さんに来てもらうこともあつたという。

2-3. 終戦と島からの引揚げ

島で暮らしていた富山県出身者の多くは、ある程度お金が貯まると、島に家を建て、昆布漁のための船を買い、浜を整備する、というように島に投資していた。郷里の家々は越冬するだけの場所であり、「そこではとても暮らしてはいけない、いずれは島に定住したい」と考える者が多かったという。このため、終戦によってすべてを失った衝撃は非常に大きかった。

1945年8月、日本政府はポツダム宣言を受諾し、日本の主権は本州、北海道、九州、四国、ならびにその周辺の小島のみとなった。当時、これら以外の土地、すなわちそれまで日本が統治下においていた海外領土や占領地、および戦地には、軍人・軍属を含むおよそ660万人の日本国民が残留していたとされている(厚生省援護局 1978)。そして、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島には約3,060世帯、およそ1万9,500人あまりが在留していた(山田 1986:48)。終戦直後、ソ連軍は千島列島の北端に位置する占守島に侵攻し、在留日本軍と交戦状態になり、日本軍の死傷者1,018人、ソ連軍の死傷者1,567人という激戦となった(富山県北方領土問題教育者会議他 2017:30)。その後、日本軍の武装解除を受けてソ連軍は千島列島沿いに南下、択捉島、国後島、色丹島と次々に上陸、ついには歯舞群島にも到達し、千島列島のすべての島々を占領下においた。

終戦後、水晶島のように、事前に女性や子どもを根室へと一時退避させるといった事例もあったようではあるが、歯舞群島からの引揚げが本格化するのはソ連軍が上陸、駐屯して以降のことになる。島民の多くは、ソ連軍の警備がさほど厳重ではなかったこともあり彼らの目を盗んで、真夜中に自前の漁船等で島を脱出し、根室へと渡った。中には、ソ連軍に発見され捕らえられたり、荒波で船が遭難し、命を落としたりする者もあったという。島を出る手段がなく、あるいは住み慣れた島での暮ら

しを捨てきれずに島に残った者も、1947年には、ソ連軍の一方的な通告により、軍人・軍属らとともに、サハリンでの抑留生活を経て函館へと強制的に引揚げさせられた（富山県北方領土問題教育者会議他 2017：31）。親戚や知り合いを頼って釧路や羅臼などの道内各地の漁場へ移る者や島との関係の深い根室周辺地域に移り住む者もいたが、富山県出身者の多くは郷里へと戻ってきた。このため、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島からの「引揚者」が最も多いのは北海道で約半数のおよそ8,700人にのぼるが、富山県は全国で2番目に多く、約200世帯およそ1,300人で、その9割が黒部市と入善町の沿岸漁村へと引揚げた（富山県北方領土問題教育者会議他 2017：31）。

終戦とともに、富山県へと引揚げてきた人びとは、満州や樺太、台湾などの「引揚者」とは異なり、数世代を経ての引揚げではなく、また毎年の帰郷、越冬のための「場」を有していたことから、引揚げ先の住民との間の摩擦は比較的少なかった。ただ、その反面、越冬のための帰郷をしていなかったために郷里に家を有していなかった人びとは住む場所を探すのに苦労したという（富山県北方領土問題教育者会議他 2017：29）。引揚げ後、しばらくは沿岸漁業や出稼ぎ漁業、日雇い仕事等で食いつないでいたが、それらで生計を立てることはやはり厳しかった。そうした中で、1952年からアリューシャン列島を中心とした公海上での北洋サケマス漁業が再開されると、富山県におけるその中心は県東部の魚津（現 魚津市）、生地（現 黒部市）、芦崎（現 入善町）へと移り、1953年に魚津に、1955年に生地に、それぞれ鮭鱒組合が結成され（北方領土問題対策協会ホームページ参照）、多くの「引揚者」が北洋サケマス漁船に乗るようになった。他方で、YKKの誘致成功により、1957年に黒部工場（現黒部牧野工場）、1958年には生地に紡績工場が操業したことなどから（COMZINE ホームページ参照）、会社員などとして新たな生活基盤を築いていく者も少なくはなかった。

3. 富山の豊かな昆布文化とその背景

次に、富山の豊かな昆布文化とそれらが根づくに至った背景、そして「北前船」との関係について見ていくことにする。

3-1. 富山の豊かな昆布文化

現在、日本国内で生産される天然昆布のほとんどは北海道で採取されており、全体の約95%に相当する。日本では宮城県以北の太平洋岸と北海道全域に分布しているが、青森県、岩手県、宮城県の東北3県の生産量は5%程度に過ぎない（農林水産省 2013）。したがって、日本全国で消費されている昆布は非常に限られた地域で採られていることがわかる。ところが、昆布の消費量に関しては、北海道の1人あたりの昆布消費量⁹⁾は全国45位と思いのほか低く（「家計調査結果」（総務省統計局）ホームページ参照）、その多くは道外へと運ばれ広く利用されていることになる。特に、富山県では、「昆布を使わない料理はない」といわれるほど、豊かな昆布食文化が根づいている。

富山県の昆布消費量は全国トップレベルであり、また昆布を取り扱う昆布業者の数も多い。現在でも街のあちらこちらに昆布専門店があり、大きな花折り昆布や量り売りのとろろ昆布などを自家用に購入していく姿が多く見られる。富山県の昆布文化を代表するものとしては魚介の昆布締めがある。魚の切り身等を昆布で挟み、一晩ほどおいたもので、これによって水分がほどよく抜け、昆布のうまみに移ることから、ただ刺身で食べるよりもいっそう風味豊かに味わうことができる。また、昆布締めにすることで傷みの早い生魚の鮮度を保つことができたことから、余った刺身の保存方法のひとつとして重宝されてきた。昆布かまぼこも他の地域では見られない郷土の味で、富山湾で採れる新鮮な魚をすり身にして、昆布で渦巻状に巻き上げ蒸した、板のない富山県独特のかまぼこである。おにぎりも海苔ではなくとろろ昆布やおぼろ昆布で巻くとい

うのが主流であり、とろろ昆布にも一般的な白いとろろ昆布と、黒い表面も使った少し酸味のある黒いとろろ昆布の二種類があり、おにぎりには風味豊かな後者が好まれるという。

また古くから仏教信仰が盛んで、信仰心も厚く、「真宗王国」とも呼ばれる富山では、昆布だしを用いる精進料理を食す機会が多く、だしに用いる昆布の消費量も高い。富山では魚や肉類を「なまぐさもの」と呼び、精進日（先祖の月命日や年回忌、葬式など）にはそれらを避けた料理を食すほか、食器や調理道具も日常的に使うものとは異なるものを使用していた（「日本の食生活全集 富山」編集委員会 1989：289）。また、親鸞聖人の命日にその遺徳を偲んで営む仏事を「報恩講」といい、富山県では古くからその命日の前後になると報恩講のお勤めが行われてきた。「ほんこさま」とも呼ばれ、かつては家々でお勤めと法話を聞いた後に親戚や家族とともに「報恩講料理」を味わっていたが、近年は各寺で法会を執り行い、その後に精進料理がふるまわれている（「日本の食生活全集 富山」編集委員会 1989：288-289）。

他方で、食以外の昆布利用の事例も数多く見られ、昆布は「よろこぶ」に通じ、めでたいものとして古くから結納品のひとつとして欠かせない存在であったほか、正月飾りやお供えなど各種行事に広く用いられてきた。正月飾り、特に鏡餅における昆布利用に着目すると、富山の鏡餅は、大小2段に重ねた丸餅の上に短く切った昆布を敷き、その上に串柿、橙（またはみかん）を載せるのが一般的とされている（「愛蔵版 暮らしの歳時記」編集委員会 2012：26）。ところが、県内すべての市町村およびその関連施設を対象とした聞き取り調査を実施したところ、富山県内の鏡餅における昆布の飾り方にいくつかの多様性があり、それらがある一定程度の類型分布を示すことが分かった（図2）。特に、大きな昆布をそのまま丸餅の下に敷いて飾る形式が県東部の黒部市を中心とした一部の地域に集中していることが注目される。

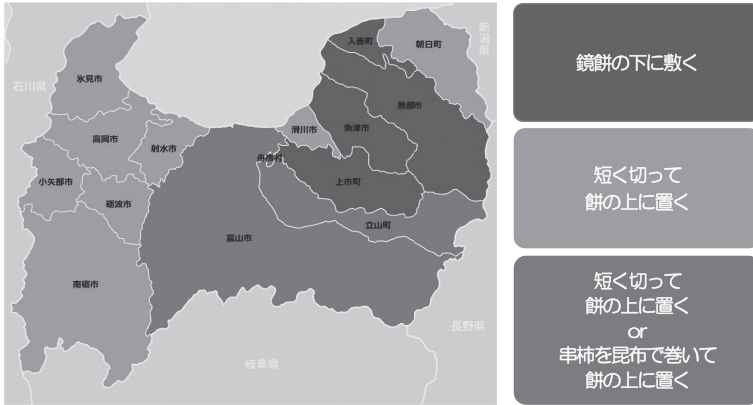


図2 富山県内の鏡餅の昆布の飾り方の類型分布¹⁰⁾

3-2. 富山県に豊かな昆布文化が生まれた背景

昆布の採れない富山県に豊かな昆布文化が生まれた背景には、富山が「北前船」の中継地であり、昆布をはじめとする北海道の海産物が数多く流入したこと、明治以降多くの富山県出身者が北海道や樺太に渡り、そうした移住者や出稼ぎ漁業者が昆布などの道産食材を富山にもたらしたこと、そして古くから仏教信仰が盛んで、精進料理を食す機会が多かったことなどがあるとされる（塩 1993：197-201）。

ところで、北海道をはじめとする限られた地域でしか採れない昆布が全国各地で幅広く利用されることになった大きな要因として、大石が指摘する「昆布ロード」の存在がある（大石 1987）。その起源は定かではないが、かつて蝦夷地や東北北部で採れた昆布は、近江商人等の廻船商人を介して日本海沿岸地域を経て福井の小浜や敦賀周辺で陸揚げされ、陸路や琵琶湖の水路を経て京の都とへともたらされていた。江戸時代に入り、海上交通が盛んになると、蝦夷地を起点とし、日本海沿岸地域を経由して下関から瀬戸内海に入り、当時の商業の中心地で「天下の台所」と称される大坂に至る「西廻り航路」が開発される。この航路を最初に

試みたのが加賀藩の三代藩主前田利常で、1639年頃のことだとされている。その後、1672年に、幕府の命により、江戸商人河村瑞賢が出羽の最上郡の年貢米を大坂経由で江戸へと運ぶ航路を拓き、「西廻り航路」が成立した（高瀬 1990：701）。「北前船」とは江戸時代中期から明治・大正時代にかけて「西廻り航路」を行き来した廻船のことで、主に上方で用いられた呼称であるが、日本海沿岸地域では「センゴクブネ」や「ベンザイセン」などと呼ばれ、富山では「ばい船」と呼ばれ、その語源は売買を行う船であるため、利益が倍増するからなど諸説ある（北前船新総曲輪夢倶楽部 2006：18）。それらは蝦夷地から昆布、鰯、鮭、鱈などの海産物等を、大坂からは米、酒、塩、紙、木綿などの生活物資等を選び（高瀬 1990：706-707）、物流の大動脈となるとともに、航海の途中で寄港する日本海沿岸地域の産品も北へ南へと運ぶ役割を担っていた。昆布を運ぶルートはさらに玄界灘を通過して南へと伸び、薩摩、琉球、そして清へ。蝦夷地から日本列島を縦断し、琉球へ、さらには清へとつながる壮大な海上の道が「昆布ロード」であり、この道によって昆布がもたらされた地域では独自の料理や食べ方が生まれたとされている（大石 1987）。たとえば、京都では京料理に欠かせない食材となり、大坂では塩昆布や佃煮が生まれ、沖縄では豚肉などと炒め、煮たりなどして食されている。その一方で、「昆布ロード」の到達の遅れた関東地方では、全国的に見るとその消費量は少なく、ダシも鰹節でとるなど、昆布の食べ方もそれを使った料理の種類も多様性が低い。つまり、かつて昆布輸送の中継地であった土地では、現在でも豊かな昆布食文化が展開されているのである（大石 1987：93）。

したがって、富山もまた昆布輸送の中継地であり、かつ岩瀬や伏木の廻船商人や薬売りをはじめとする越中商人がその輸送に深く関わっていたことが、富山に豊かな昆布文化が生まれた大きな要因のひとつとして考えられているのである。

4. 「引揚者」によってもたらされた文化的影響

富山県に豊かな昆布文化が根づいた要因についての同様の指摘は、聞き書きにより富山県内各地域の昭和初期の食生活・料理を詳細に記録した『聞き書 富山の食事』にもあり、富山、大阪、沖縄が昆布消費量の上位に位置しているのは、「長年の北前船によるこんぶの道形成によるものである」（『日本の食生活全集 富山』編集委員会 1989：340）としている。

ただ、これらの見解には再考の余地がある。確かに富山は「北前船」の中継地であり、「北前船」は昆布も運んでいた。しかし、それは、石川県や福井県、山口県でも条件は同じであり、特に富山県がそうであるという理由にはならない。加えて、「北前船」が運んだ北海道の水産物の内訳について見てみると、8割以上が鯨や鮭鱒であり、昆布はごくわずかで7%に過ぎない（図3）。また、「北前船」が活躍したのは江戸の中期から1890年代末にかけてである。その頃、昆布は清への重要な輸出品であり、一説には、薩摩藩は琉球と清との間の朝貢貿易（中琉貿易）を利用して富山の薬売りが運んだ昆布を清に大量に輸出することで藩の財政の立て直しと倒幕のための蓄財をなしたとされるほどであった（大石

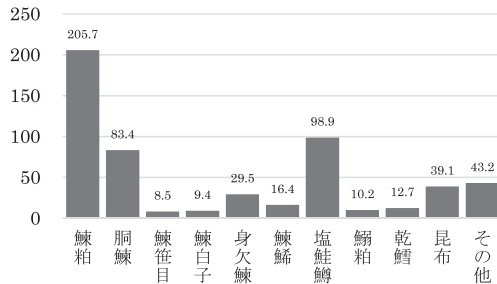


図3 北海道移出主要水産物（1879）（単位：万円）

（『近世日本漁村史の研究』（荒居 1963）より作成）

1987:109-110)。それほどの価値があり、貴重であった昆布が、富山で、しかも庶民の間で豊かな食文化を形成するほど食されていたとは考え難い。富山で昆布が消費されたと考えるよりも、京や大坂、そして長崎、鹿児島へと運ばれる際の中継地であったと考えるほうが無難である。さらには、北陸における「西廻り航路」の主な拠点、現在の富山県の岩瀬、放生津、伏木、そして石川県の七尾、輪島、金石、大野であるが、これらはすべて加賀藩の港であり、富山藩の港はひとつもない。もし「北前船」が豊かな昆布文化をもたらしたのであれば、富山県ではなく、旧加賀藩、現在の石川県により豊かな昆布文化が根づいて然るべきである。

これらのことを踏まえると、富山の豊かな昆布文化と「北前船」との関係性はそれほど深くなく、むしろ、岩瀬、放生津、伏木といった「西廻り航路」の拠点があったことで、明治以降も北海道とのつながりが維持され、人と物資の行き来が盛んに行われた。その結果として、後に豊かな昆布食文化が形成される下地が作られ、さらには、多くの富山県出身者が北海道や樺太、千島へと移住する、漁業出稼ぎに出る、あるいは北洋漁業が発展する、などの土台が生まれることになったと考える必要がある。

他方で、富山県の昆布消費量の推移に着目すると、1934年から10年の統計では福井県が1位で富山県はそれほどでもない(図4)が、1950年から1951年の統計では1位にまで上昇しており(図5)、その消費量が著しく増加するのは戦後になってからのことであることがわかる。また、大正末期から昭和初期にかけての黒部市内の昆布の需要状況について、「当時の人は昆布よう食べんかった。歯舞方面に出稼ぎ行っとった人たちがお土産で持って帰ってくるぐらいやった」(塚田 2008:121)という証言があり、大正時代以前の当地には、現在のような豊かな昆布食文化は根づいていなかったことがうかがえる。つまり、富山県と歯舞群島等の間を数多くの漁民が行き来し、北海道の海産物等がもたらされ

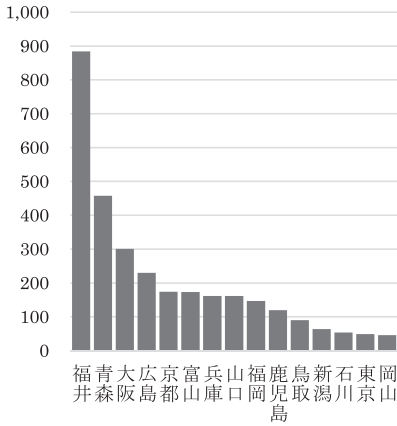


図4 都道府県別昆布消費量
(1934-1935年、単位：匁)

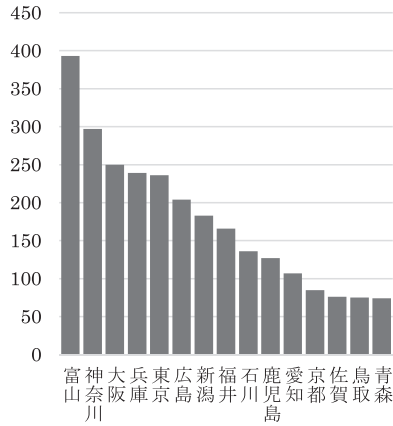


図5 都道府県別昆布消費量
(1950-1951年、単位：匁)

(『昆布の生産から消費まで』(中川 1953:19-20)より作成)

るようになってから、郷里の食生活が大きく変化したと考える方が的を射ているのである。これらのことから、「北前船」の存在や古くからの仏教信仰がその下地となったことは間違いないが、それらが直接的に作用した可能性は低い。したがって、富山県に豊かな昆布文化が生まれた直接的な要因は、明治以降多くの富山県出身者が北海道や樺太に渡り、そうした移住者や出稼ぎ漁業者が昆布などの道産食材を富山にもたらしただことにあると考える。

歯舞群島等で昆布漁に従事していた富山県出身者の多くは、4月から11月までの昆布が採れ、その生産に適した時期は鳥々にとどまるものの、仕事のない冬場(12月から3月)の間は富山で暮らした。そうした彼らのために、年一往復、根室と富山を結ぶ臨時の団体列車が運行され、多くの富山県出身者が越冬のために郷里に戻ってきていたのである。そして、一時帰郷する際に、親戚縁者や隣近所に配るため、あるいは自宅用として消費するため大量の昆布を郷里に持ち込んだ(8貫=30kg×

2~3 ぐらい/1 世帯)。1 軒だけではなく何軒もの家々が隣近所へと昆布を配って歩いたことから、特に県東部の沿岸漁村の家々にとって昆布は常在する身近な存在となり、さまざまな用途に用いられ、豊かな昆布文化が生まれた可能性が高い。そうした中で、大きな昆布を鏡餅に飾る習慣も生まれ、それが今に引き継がれ、特徴的な類型分布を示していると考える。また、当時、生地地区にあったとされる根室から仕入れた昆布を加工し、とろろ昆布を生産する「出稼ぎ組合」の加工場もまた昆布食文化の普及拡大の一因となったと考える。

戦後、樺太や歯舞群島、色丹島などでの昆布漁が途絶えたことで、昆布の生産量も大きく減少することになるが(中川 1953)、終戦前の最大の輸出先であり、消費地でもあった中国への輸出も止まってしまったため、比較的安価に昆布を入手できる状況にあったことが推測される。そうした中で、中国に代わる昆布の移出先として、昆布の消費量が拡大しつつあった富山が浮上し、生産地からの働きかけや根室や羅臼の昆布漁従事者等との関係もあって、現在につながる昆布の一大消費地へと成長していった可能性が高い。

5. おわりに

たび重なる戦争による昆布需要の高まりを背景として、富山県から多くの漁民が歯舞群島等へと移り住み、あるいは出稼ぎ漁業者として昆布漁に従事することになった。そうした彼らのために、臨時の団体列車が運行され、それらの島々で昆布漁に従事していた富山県出身者の多くが越冬のために一時帰郷する。その際に多くの昆布が持ち込まれ、彼らの郷里に暮らす人びとにとっても昆布が身近な存在となり、豊かな昆布文化が育まれていった。このように、富山県の豊かな昆布文化は、歯舞群島等への移民および出稼ぎ漁業者の毎年の一時的帰還によってもたらされた可能性が高く、その文化的影響の一部が鏡餅に飾る昆布の類型分布に

見られる特徴のひとつとして現れているのである。

終戦とともに富山県に引揚げてきた人びと、特に歯舞群島等からの「引揚者」の事例は、数世代を経て帰還ではないこと、帰還先に毎年の一時期帰還、越冬のための「場」を有しており、近隣住民との関係を維持していたことなど、特異な要素が多く、他の事例と一概に比較することは容易ではない。しかし、移住先での失敗の可能性を踏まえて、あるいは単に長期間留守にする家屋や土地の留守や両親および幼い子ども達への気遣いなどをお願いするために彼らが実践した、隣近所との良好な関係を維持することを目的とした「贈与」が、結果的ではあるにせよ、一時帰還の地であり帰還の地である富山に大きな文化的影響を及ぼし、豊かな昆布文化を根づかせたことには注目する必要がある。

「贈与」とは、相手が必要としているとは限らないモノやサービスの一方的な提供であるが、その贈り物を受け取った側は、それが必要なモノやサービスであったかは別として返礼の必要性を感じることになる。つまり、贈り物を与えることは相手に負い目の感情を抱かせることになり、それが返礼の義務を生み出すのである。そして、そうした負い目の感情を一時的に受け入れ、一定期間を経て何らかのモノやサービスを贈り返すことによって、相互間の関係性が維持されたり、新たな人間関係が創出されたりする(小馬 2000:49)。彼らにとってそれは意図したのではなく、自己顕示に過ぎなかったかもしれないが、毎年、帰郷の際の昆布の「贈与」によって、毎年、一時帰還、および将来の帰還や不意の帰還に備えた近隣住民との関係性が維持され、歯舞群島等からの「引揚者」の多くは大きな摩擦を生み出すことなく、戦後の新たな暮らしを歩むことができた。また、近隣住民は、はじめは迷惑なものであったかも知れないが、渋々であれ、その「贈与」と関係性の双方を受け入れる一方で、受け取った昆布を自らの暮らしに徐々に取り込みながら豊かな昆布文化を生み出してきた。このことから、次のような仮説が導き出される。す

なわち、昆布という異文化が富山の文化として取り込まれているという事実は、昆布という異文化をもたらした「引揚者」が受け入れ先の地域住民に受け入れられたという証であり、彼らによって試みられた「贈与によって関係性を維持、構築する」という働きかけが成功した結果である。そして、この仮説が検証されれば、一方では、自文化として取り込まれている異文化が「自文化化」される経緯をたどることで、移民や帰還移民の戦略や受け入れの経緯を明らかにする、他方では、移民や帰還移民の文化を受け入れる方向に導くような働きかけを考案、提示することで、地域住民との間の摩擦を軽減する、などの応用が可能になる。もちろんこれはあくまでも仮説であり、多様な事例を用いて検証されなければならず、再考の余地も多分にある。しかしながら、移民や帰還移民によってもたらされる文化的影響には大きな可能性が内包されていることは確かであり、文化をあつかう文化人類学であるからこそ、その移民研究においても文化に着目し、移民および移民の帰還によってもたらされる文化的影響について比較検討していくことが重要であり、その成果は文化人類学の移民研究の推進に大きな意義を持つものとなるばかりでなく、移民研究全体の充実に大きく寄与することが期待できると考える。

謝辞

最後になりましたが、ご多忙のところ、調査を快く引き受けていただいた方々、特に聞き取り調査にご協力いただいた方々に深く感謝いたします。

なお、本稿は、「平成 27 年度星城大学リハビリテーション学部研究費」(2015 年 4 月～2016 年 3 月)による調査研究の成果、および「平成 27 年度課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業(実社会対応プログラム)」(2015 年 10 月～2018 年 9 月)による研究成果の一部である。

注

- 1) 山田(1986)が分析に用いている1967年公表の「北方地域元居住者名簿」にもとづく数値である。なお、この名簿は、出身地別ではなく1967年現在の居住地ごとにまとめてあるため、富山県出身者であっても他の都道府県に引揚げた者、および富山県に引揚げた後に他の都道府県に転出した者などは含まれていない。したがって、富山県出身者の実数は多少上回る可能性がある。また、歯舞群島等には、居住者以外にも多くの出稼ぎ労働者が富山県から渡り、昆布漁に携わっていたとされている。
- 2) 19世紀初頭から1880年代にかけて、富山県東部の新川地方は全国でも有数の白木綿生産地帯であった。その製品は「新川木綿」と呼ばれ地域外に広範な販路を有していた(谷本 1991:107)。
- 3) ただし、1890年代に入り北海道への出稼ぎ漁民が急増した背景には、漁場持制度の変化やコレラや文明病の進入で、これまで安価な労働力として使役されてきたアイヌの人びとを用いることが難しくなり、道内全域で深刻な労働力不足に陥ったこともその一因とされている(山田1986:58-59)。
- 4) 本節の内容は、著者による旧島民への聞き取り調査にもとづくものであり、『四島は私たちのふるさと』(富山県北方領土問題教育者会議・北方領土返還要求運動富山県民会議 2017)および「第7章 黒部市における元移動生活者たち」(塚田昌紀 2008)によってその不備を補っている。
- 5) 1ひろが約1.5mであることから、およそ6m。
- 6) 「鉤竿」:長昆布用で、竿の先がL字型になっており、海中の昆布を竿先ですくい上げて船に引き寄せる。
「鉤ねじり竿」:長昆布用で、「鉤竿」のL字型と「ねじり竿」のV字型を合わせた形状になっており、L字型の部分ですくい上げてから、V字型部分に絡ませて回転させながら抜き採る。水深が深く、潮の流れが速い場所に繁殖している昆布を採る時に使う。
「ねじり竿」:厚葉昆布(ガッガラ昆布)用で、竿先に板状のものを取り付け、竿先に絡めて回転させて抜き採る。

「しばねじり竿」：バフラ昆布（クキナガ昆布、オニ昆布）用で、竿先がV字型になっており、竿先に昆布を挟み込み、回転させて抜き採る。地域によっては「マッカ」とも呼ばれている。

（以上、聞き取り調査ならびに北海道水産物検査協会ホームページ参照）

- 7) 昆布の両側についている実の薄いところのこと。「ひれ」ともいう。はさみなどで一枚一枚丁寧に切り落とし、昆布の形を整える。
- 8) 1段は重さ8貫600匁（約35kg）。長さ4尺（約1.2m）の長さに切り揃えた昆布を積み重ね、重さを量り、筵と縄で梱包して出荷していた。
- 9) 総務省統計局の「家計調査結果」にもとづく平成26年から平成28年の二人以上世帯の昆布の購入に係る年間支出金額の平均値。
- 10) 富山県内全14市町村の教育委員会および富山県教育委員会および各教育委員会の関連部局、ならびに県内の自治体博物館・資料館等に依頼状と調査票を送付し、受領後に電話等での聞き取り調査を行い、これにより得られた情報をもとに作成している。調査票の内容は以下の通りである：1. 地域の鏡餅・お供えにおける昆布利用について、2. 地域の正月飾り（しめ縄飾り、門松、正月棚など）における昆布利用について、3. 正月以外の行事や祭事（お盆、秋祭り、新築の建前祝儀、結納、葬儀など）での昆布利用について、4. 贈りもの（新年の挨拶、季節の贈答、祝いの贈答、引き出物、香典返しなど）への昆布の利用について、5. そのほか、食以外で昆布を利用している事例などについて。

参考文献

「愛蔵版 暮らしの歳時記」編集委員会（編）

2012『愛蔵版 暮らしの歳時記——石川編・富山編』、北國新聞社出版局。
荒居英次

1963『近世日本漁村史の研究』、新生社。

蘭信三

1994『「満州移民」の歴史社会学』、行路社。

蘭信三（編）

2011『帝国崩壊とひとの再移動 ― 引揚げ、送還、そして残留』、アジア遊学、145、勉誠出版。

岩槻泰雄

1995『戦後引揚げの記録 新版』、時事通信社。

大石圭一

1987『昆布の道』、第一書房。

大川真由子

2010『帰還移民の人類学 ― アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』、明石書店。

大谷清隆・大西光代

1995「北海道南西沿岸のこんぶ生産量の春ニシン漁獲量と沿岸水温による重回帰分析」『海の研究』、4(3)：175-185。

北前船新総曲輪夢倶楽部（編）

2006『海拓 ― 富山の北前船と昆布ロードの文献集』、富山経済同友会。

黒部市史編纂委員会（編）

1992『黒部市史 歴史民俗編』、黒部市。

厚生省援護局（編）

1978『引揚げと援護三十年の歩み』、ぎょうせい。

小林英夫

2005『満州と自民党』、新潮社。

小馬徹

2000『贈り物と交換の文化人類学 ― 人間はどこから来てどこへ行くのか』、御茶の水書房。

塩照夫

1993『昆布を運んだ北前船 ― 昆布食文化と薬売りのロマン』、北國新聞社。

島村恭則

2013「序章 引揚者の戦後」『引揚者の戦後』島村恭則（編）、1-10、新曜社。

島村恭則（編）

2013『引揚者の戦後』、新曜社。

Smith, Andrea L. (ed.)

2003 *Europe's Invisible Migrants*, Amsterdam University Press.

高瀬保

1990『加賀藩流通史の研究』、桂書房。

谷本雅之

1991「新川木綿と越中高岡綿問屋 — 福岡屋清右衛門家の繰綿取引き」
『富大経済論集』、37(1)：107-139。

塚田昌紀

2008「第7章 黒部市における元移動生活者たち」『黒部市・入善町調査
記録 — 地域社会の文化人類学的調査 (XVII)』富山大学文学部文化人
類学研究室（編）、109-124。

富山県北方領土問題教育者会議・北方領土返還要求運動富山県民会議

2017『四島は私たちのふるさと』、富山県北方領土問題教育者会議。

中川一雄

1953『昆布の生産から消費まで』、北海水産新聞社。

「日本の食生活全集 富山」編集委員会（編）

1989『聞き書 富山の食事』、日本の食生活全集 16、農山漁村文化協会。

農林水産省

2013『平成 25 年 海面漁業生産統計調査』、農林水産省。

永井秀夫

2007『日本の近代化と北海道』、北海道大学出版会。

野添憲治

2006『大地に挑む東北農民』、社会評論社。

北海道総合政策部情報統計局統計課

2017『平成 29 年 第 124 回 北海道統計書』、北海道。

北水協会

1918「本道の沃度及び加里」『北海の水産』、53：26-27。

三室辰徳

2001「第二次世界大戦における旧満州浜松開拓団の集団入植——浜松市白昭を事例として」『立命館地理学』、13：1-13。

山田時夫

1986「越中漁民の北海道・北方領土への進出とその背景について」『根室博物館開設準備室紀要』、1：47-60。

渡辺茂

1968『根室市史 下巻』、根室市。

参考ホームページ

「家計調査結果」（総務省統計局）ホームページ

<http://www.stat.go.jp/data/kakei/5.htm>（アクセス日：2018年1月15日）

COMZINE ホームページ

https://www.nttcom.co.jp/comzine/no013/long_seller/（アクセス日：2018年1月14日）

北海道水産物検査協会ホームページ

<http://www.h-skkn.or.jp/>（アクセス日：2018年1月15日）

北方領土問題対策協会ホームページ

<https://www.hoppou.go.jp/gakushu/watashitachi/toyama/index.html>（アクセス日：2018年1月14日）

